

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進校 実施報告書

【都道府県】 宮城県

【学校名】 宮城教育大学

【テーマ】 **I** II III IV V

- I オリンピズムの教育的価値
- II おもてなし精神とボランティア
- III パラリンピックと障害者スポーツ
- IV 日本文化と異文化・国際理解
- V スポーツを楽しむ心

【実践研究タイトル】

地域社会におけるスポーツの持つ力を教える総合的な体育科指導計画づくり

【実施学年、部、講座等】

教育学部・保健体育講座所属学生 1～4 学年 50 名

【目的・ねらい】

子どもの人格形成及び地域共同体の形成・発展におけるスポーツの力について理解し、スポーツの持つ力を学校体育に生かす方法を学ぶ。具体的には、（１）戦時復興期にあるカンボジアにおける運動会・学校体育に関わる教育支援活動の実態を通じて、スポーツの持つ力について理解し、（２）子どもの生活課題・発達課題及び地域の抱える課題を調査を通じて把握し、（３）そこでつかまれた課題に応える体育授業づくり（プレイの学習・体育理論）を行うことを目的とする。

【種類】(当てはまるものに○)

- ・各教科（保健体育科教育法、教職実践演習、体育・健康基礎演習）
- ・教科以外での取組（ボランティア活動（開発途上国への教育支援活動））

【実践内容等】

（実施内容） ※適宜、様子を示す写真、図表、記録を含めてください。

（1）途上国への教育支援活動（カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさ伝えるプロジェクト）

上記の講義受講生に対してカンボジアにおける国際教育支援活動を行うプロジェクトへの参加を呼びかけ、結果的に7名の受講生が参加した。4月以降、①プロジェクトの運営及び内容（カンボジ



(実施内容の続き)

アにおける運動会・体育授業)の準備・企画、②カンボジアの政治・経済・文化、学校教育の制度・内容の歴史、今日的な学校教育の実施上の課題についての学習会、③東日本大震災被災地域(気仙沼市・東松島市)における現地調査・聞き取り調査、④「復興」期における体育・スポーツが果たす役割を考え合うシンポジウムの企画・運営に取り組んだ。

プロジェクトの実施後、上記講義受講生に対して取り組み内容を報告するとともに、主として④「復興」期における体育・スポーツが果たす役割についてのシンポジウムへの参加を通じて、子どもの必要・要求に応える学校教育とはどのようなものか、体育・スポーツはどのような役割を果たしうるのか、体育授業・体育行事は、どんな目的・内容を備えるべきなのかについて考えた。



「復興」に体育・スポーツが果たす役割

運動会を通じた教育的社会関係資本の形成と学校体育カリキュラムの開発



日時： 2016年2月5日(金) 9:00~12:00
会場： 210教室
シンポジスト / 海野舞三(山口大学・教育学部・教授)「開発途上国における国際教育支援と体育・スポーツ」
梶野博弘(東松島市立南松島中学校)「復興とともに 震災復興における体育・学校・生命」
梶野一敏(宮城教育大学体育・健康コース2年)「プロジェクトを通じて学んだ復興と教育」
司会 / 高川哲也(宮城教育大学・保健体育講座・准教授)

後援： 宮城教育大学「復興教育学」プロジェクト、文部科学省オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業

(実践上の工夫点、留意点等)

プロジェクトに参加した学生の経験を未参加学生へ還元するための方法を工夫した。授業内容として、プロジェクトの様子を報告すると同時に、プロジェクトの企画・運営において一貫して問題となった「子どもの必要・要求に応える学校教育・体育のあり方」について各授業におけるテーマ(演習発表テーマ、授業づくりの目標・内容、実践の振り返りの観点)として取り上げた。

(成果) ※児童・生徒の学習効果、意識変容等の効果について、可能な範囲でアンケート結果等概要を記入してください。

以上の取り組みを通じて、参加学生は以下のように学校や体育についての意識を変容させた。

① プロジェクトへの参加を通じて

:教育の形や学校はくにもよってさまざま。勉強を教えるだけが教育ではないと思う。カンボジアの子どもたちにとって本当に必要な学びとはなんなのか?また、学校の持つ意味についても考えられるようになった。日本では行くのが当たり前だが、カンボジアでは行きたくても行けない

子どもがいる。では、行けない子に対して学校はどんなことができるのかを考えたいと思った。
:(カンボジアの)子どもたちが職に就くために必要なのは学力なのでしょうか。勉強なんかより、職に就くための技術や方法を身につけたりする方が、彼らの生活のためになるのではないかなと思います。それでも子どもたちは、学校に行って勉強したいと思っています。そんな子どもたちに対して、学校ではなにを教えればよいのか、カンボジアの子どもたちに必要な教育って何なのか…今の競争社会の世の中で、生きづらさを抱える子どもは必ずいると思います。震災とは違うつらさや人に言えない悩みを抱えています。そんな子どもたちに必要な教育は、やはり自分が生きている意味や生きたくても生きられない人の分まで生きる意味を考えさせ、感じさせることだと思います。

② シンポジウムへの参加を通じて

:今回話を聞いて、「復興」とスポーツは切り離せないと思いました。カンボジアでの体育の授業も、運動会も、スポーツと触れあうことで顔だけでなく内面から笑顔になれると思いました。また、被災した子どもたちに対して完全に理解することはできないけど、理解しようとする姿勢、分かるようにする、近づこうとする気持ちが大切だと思いました。カンボジアは、その地域にふさわしいカリキュラムを作ったり、目指したりすべき教育とは何かを保護者に理解してもらい、教育を根本からつくっていく必要があると思いました。

:被災地の復興や途上国の教育への体育・スポーツが果たす役割という、新たな視点から見る体育というのは、自分の中で斬新で非常に面白いと感じた。確かに「教育」というものを考えたときにまず出てくるものは、状況によって異なるかもしれないが、体育ではないだろう。しかし、話を聞いていると、「復興」という視点から見て、確実に重要な役割を果たしているように思えた。私はいままでの学生生活では、「ボランティア」に全く従事してこなかったが、今日の講義の中で被災地や発展途上国の教育のいっぺんを見聞きする中で、自分もボランティアに参加したいと心底思った。現状を知るだけでなく、考えを改められる、よい機会になった。

【オリンピック・パラリンピック教育の実施に伴う課題点】

※オリンピック・パラリンピック教育の継続的な展開に向けて、実践を通して得られた課題点がございましたら、自由に記述してください。

大学の場合、プログラムの対象がどうしても限定的となってしまう。したがって、取り組みの成果を可能な限り多数の学生に拡大していくためには、授業外のイベント等を企画せざるをえない。年度当初から講座・学部単位での事業計画を立案し、組織的に取り組む必要がある。特に、取り組みを実施するための時間・単位補完等のカリキュラム上の配慮について工夫する必要がある。